

(曾於郡有明町原田)

位置と環境

長田遺跡は野神原の南端に位置し、標高約33mの舌状台地の畑地に立地している。遺跡の西岸には田原川が流れている。

この野神原南端には、大塚古墳群があり、その中には原田古墳と呼ばれる周囲約125mの円墳が現存し、昭和54年には、その原田古墳のすぐ近くの畑地で、軽石製の石棺をもつ地下式横穴墓が発見されている。

調査の経緯

本遺跡の調査は、農用地総合整備事業に伴う農道建設により、有明町教育委員会が緑資源公団から委託を受けて、県教育委員会の協力を得て平成10年度に確認調査、平成11年度に本調査(3120㎡)を行った。

遺構と遺物

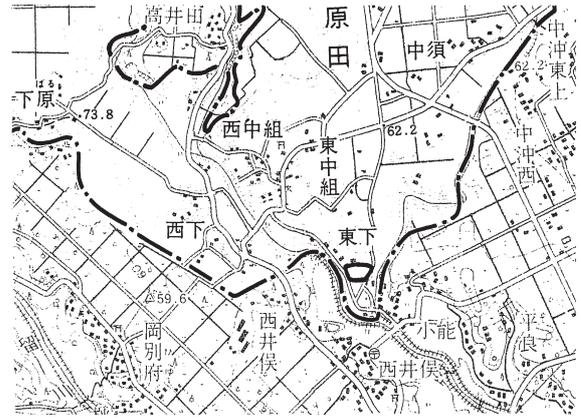
遺構は、主として、弥生時代の竪穴住居跡や棟持柱付掘立柱建物跡、古墳時代の竪穴住居跡、中世の土壇墓等が池田降下軽石を含んだ層で検出した。

弥生時代の竪穴住居跡は4軒(1号・3号・6号・7号)検出され、1号及び7号竪穴住居跡は完全な全体プランをもち、1号は508cm×564cm、7号は390cm×373cmで隅丸長方形を呈している。棟持柱付掘立柱建物跡は、9基の掘立柱建物跡が1180cm四方の方形に配列され、その北西及び南東に棟持柱と思われる柱穴が2基確認できた。その柱穴は9棟の掘立柱建物跡のある方向に傾斜していた。

古墳時代の竪穴住居跡は3軒(2号・4号・5号)検出され、2号竪穴住居跡は完全な全体プランをもち、507cm×490cmの隅丸長方形を呈している。この竪穴住居跡からは、床面のほぼ中央に出土した直径50cmの放射状に出土した炭化材(写真1)を検出している。また、床面の壁側を巡るように幅約10cm深さ約5cmの壁帯溝と思われる遺構も検出されている。

中世の土壇墓は1基検出され、直径260cm短径130cmの楕円形を呈し、長径部が南北に延びている。

遺物は、弥生時代の山ノ口式土器、古墳時代の成川式土器ややりかん 鉢1点(2号竪穴住居跡床面より)、中



第1図 長田遺跡の位置

世の青磁片、白磁片、完形白磁碗2点(土壇墓より出土1点)、土鍋1点等が出土した。弥生時代・古墳時代の遺物は、竪穴住居跡や棟持柱付建物跡等の検出された広い範囲内より出土した。

特徴

本遺跡は、古墳時代の竪穴住居跡で検出した炭化材と、床面に検出された壁帯溝により、古墳時代の竪穴住居の構造を知る上で重要な遺跡であると思われる。

なお、この2号竪穴住居跡から検出された炭化材の樹種同定及び放射性炭素年代測定を行った結果、炭化材の樹種についてはクリ(ブナ科クリ属)であり、放射性炭素年代測定は下表のとおりであった。

資料の質	年代値	誤差(±)	δ13C
炭化材	1590	60	-29.1

資料の所在

出土遺物は、有明町教育委員会に保管されている。

参考文献

有明町教育委員会2003「長田遺跡」『有明町埋蔵文化財発掘調査報告書』(2) (出口順一朗)



写真1 炭化材出土状況